

宗門総合振興計画

Vol.29



お寺で行うインターンシップ

— お寺を拠点とする魅力的な学びへの模索 —

北海道教区上川南組慶誠寺のケースから
インターンシップの価値を考える

龍谷大学農学部が寺院を拠点として農業体験を行う「お寺de農業インターンシップ」。「インターンシップ」とは「職業体験」のことで、学生のうちに実際の仕事の現場を経験することで、就職後の自分の姿を具体的にイメージしてもらおうと企画されているものです。

現在、多くの企業がインターンシップ制度を取り入れ、たくさんのお寺へ宿泊しながら、農林水産業について経験してもらっています。

今回、取材させていただいたのは旭川市にある菊枝山慶誠寺です。旭川龍谷高校とコラボして塗香（くろゆり香）を作

り、4月下旬、北海道白老町に貴重なアイヌ文化を発信するために誕生する国立民族共生象徴空間（ウポポイ）でも取り



扱いが予定されているなど、さまざまな企画を展開し、マスコミにもしばしば取り上げられる慶誠寺ですが、昨年の8月、3人の龍谷大学農学部 of 学生を受け入れていただきました。ご住職である石田慶嗣さんからお話を聞きました。

北海道旭川の農業体験の意義

ご住職の石田慶嗣さんから、まずは旭川にある自坊でインターシップを受け入れた理由をお聞きしました。

一つには「北海道の農業」を見てほし

いというのがご住職の思いでした。北海道には大規模に展開している農業もあるし、また零細ながら特色ある経営で農業を営んでいるところもあります。その両面を見てもらうことで北海道の農業を実感いただき、農業の可能性・将来性を体験してほしいというのがインターシップ受け入れの思いだったそうです。

まず、大規模農業は、1000頭の牛を飼育している稲川牧場と、ドローンを用いたメガファーム市川農場。稲川牧場では15〜20人ほどの人がはたらき、年間

10億円近い売り上げがあります。また、牛のし尿を使った発電も手掛けています。

市川農場では作付面積が60町余りにおよぶため、ドローンを利用した水田管理・肥料散布などを行っており、規模の大きさに驚きの声が上がったそうです。ここでは、北海道で古くから作られ、長く作付されていなか



った「ゆきひかり」という品種を科学的に再評価し、米アレルギー対応の安全なお米として生産・販売され、評判を呼んでいます。

一方で、乳牛などを10頭余りしか飼育していない家族経営の伊勢ファームにも行きました。もちろん、小規模だと乳牛からミルクをとるだけでは、利益が薄く経営が成立しません。しかし、これが上質なチーズになると、8〜9倍の価値となります。伊勢ファームで作られる「江丹別の青いチーズ」はJAL・ANAの国際線ファーストクラスでも提供され、

全国で大人気になっています。

学生たちの感想を読むと、大規模農場を見た上で、小さな規模でも工夫して経営を成立させている農場を見学し、大きな気付きがあったようです。

北海道の自然から学ぶ命のやり取り

もう一つ、石田住職が思いをこめたプログラムがあります。

それは、旭山動物園を見に行くことです。来園者を大きく増加させたことで有名な、あの旭山動物園の特徴の一つは「行動展示」です。

行動展示とは、これまでの展示方法と大きく異なる点があります。それまでの展示方法は、分類したり、地域ごとに分けたり、ただ柵の中にいる動物を見せたりというものでした。

一方で、行動展示は「動物のすごさ、美しさ、とくと尊さを伝える」ことを目的にしています。動物本来の生き生きとした「走る・飛ぶ・泳ぐ・捕食する」といっ

た姿に、美しさや尊さを感じてもらおうという展示方法なのです。

「学生に楽しんでもらえる観光を入れてらっしゃるんですね」と石田住職に聞いたのですが、それは全くの的外れでした。農業とは、自然の中で行うものであり、その自然がどのように変化してきたかを学ぶ必要があります。かつて、北海道の食物連鎖しょくちうれんさの頂点にはエゾオオカミがいました。そのエゾオオカミがいなくなったことで、野生動物による食害が生じていること、ジビエ料理の開発など、エゾオオカミがいなくなった自然へ工夫して対応している農業を学んでもらうことが目的だそうです。

北海道には、まだ自然が残っており、その自然と人間がどのように繋がっているか、命のやり取りの中で人間の生活が成立していることを、動物園の展示から学んでほしいという目的から、プログラムの中に動物園が入っているのです。

お寺での寝泊まりから

お寺への固定観念を変える

慶誠寺は、若者や子どもが集う寺です。先に紹介しましたが、隣接する旭川龍谷高校とコラボしてお香を開発していますし、BBQ大会、寺子屋、また除夜じよやの鐘は「幻冬フェスタ」と称し花火をあげる一大イベントになっており、門信徒だけでなく、地域の方々がたくさん訪れる催しもよおになっています。また偶然ですが、今回のインタラシップは、お寺でナイト「夏の夜の怪談ライブ」の開催と日程が合ったため、学生たちも参加しました。この「夏の夜の怪談ライブ」では、怪談が語られ、ビアガーデンあり、じゃんけん大会ありの盛りだくさんの企画で、遠くから参加する若者もいます。せつかくお寺に寝泊まりするのだから、お寺の伝統的なことを経験していたくのも大事ですが、農業に関わる場合、お寺が若い人が集えるところであ



のことをお聞きしました。

受け入れ側の願い

まず、インターンシップを受け入れる上での苦勞についてです。お寺に寝泊まりするわけですから、宿泊の準備などが大変かと思いましたが、カリキュラムを組むことが一番苦勞されたそうです。

もう一つお聞きしたのは、受け入れ側の感想です。石田住職は、受け入れ側の強い思い、願いを感じられたようです。せっかく北海道で農業体験をするのだから、ただ物見遊山ものみゆざんで参加するのではなく、農業の現実をしっかりと経験してほしいという願いがあり、次回のカリキュラムは、それを反映したものになっています。

通常のインターンシップの場合、単独の企業等が受け入れを

り、活用してもらえる場所だと知っていただきたいと石田住職はお話しくださりました。

他寺院でのインターンシップでも同じことが言えますが、多くの学生たちはほとんどお寺のことを知りません。インターンシップは、お寺へ親近感を持っていただく大切な機会ともなっています。

お寺でインターンシップを行う苦勞

これからお寺でインターンシップを受け入れてみようという方のために、二つ

し、寺院が受け入れるインターンシップは、寺院側が農業体験させていただくところに依頼をかけ、応諾おうだくいただいた後に、実際に学生の応募があるか、人数は何人になるかといったことが決まってきます。応募がなければ、お断りを入れなくてはなりません。受け入れ側への配慮も含め、寺院側に大変ご尽力いただくことになるわけです。受け入れ先への協力依頼においては、寺院との間に深い信頼関係が必要となってきます。

そのためには、二つのことが大事であると石田住職は指摘されます。一つは、ゆっくり、じっくり学ぶこと。体験ツアーのようにならないように時間配分・体験内容を検討すること。もう一つは、学生側の準備とインターンシップ終了後の大切さ。「楽しかった」では終わらない、問題意識を持って帰ってもらえる体験になることを、寺と受け入れ側とが一体となって目指されています。

本当に実のあるインターンシップとな

り、未来の農業を切り開く人材となつてほしいという強い願いの中で、慶誠寺のインターンシップは実施されているのです。

地域に繋がるお寺であること

インターンシップ

慶誠寺は、地域に開かれたお寺です。門信徒を大切にされているとともに、地域の方々、若者や子どもにも開かれています。

インターンシップは、お寺がより一層開かれていく事業と言えます。前にも触れましたが、慶誠寺の石田住職は、元々、地域との広く強いネットワークをお持ちです。それが、今回のプロジェクトに大いに活用されています。

インターンシップを実施するためには、お寺に宿泊するだけではなく、地域の農林水産業を実体験してもらわなくてはなりません。そのために農林水産業に従事されている事業者の方に学生の

受け入れをご依頼し、協力してもらう必要があります。

一方で、事業主から見ると、お寺がそ



んなことをするんだという驚き・気付きがあることでしよう。それがまた、お寺と地域の、少し形を変えた繋がりを生んでいきます。お寺でのインターンシップは、学生の学びの場でもありますが、加えて地域とお寺を繋いでいく事業にもなっているのです。

今は龍谷大学の農学部から募^もっていますが、お寺を宿泊場所とするインターンシップで地元の大学生が参加するようになると、大学生と寺・寺のある地域との繋がりが生まれてきます。お寺de農業インターンシップは、今後の発展が期待できる企画であると感じられた取材でした。

〔寺院活動支援部（過疎地域対策担当）
浄土真宗本願寺派総合研究所副所長 藤丸智雄〕

※お寺de農業インターンシップについては寺院活動支援部（過疎地域対策担当）までお問い合わせください。